

高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称） 文化庁エリア展示方針

令和8年3月

文 化 庁

目 次

I	はじめに	1
II	高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）展示について	
1	基本的な考え方（文化庁エリア全体）	2
2	展示資料、手法について	3
3	展示空間構成	3
4	展示の形態	
(1)	常設展示	4
(2)	企画展示コーナー	4
(3)	古墳壁画・石室石材保存管理室（観覧区画）	5
5	展示解説について	6
III	常設展示室	
1	施設概要	7
2	展示のねらい	7
3	コンテンツ構成とストーリー	8
4	展示展開例	11
IV	その他	
1	観覧料	12
2	運営への民間事業者の参画	12
V	高松塚古墳関連資料について	13

I はじめに

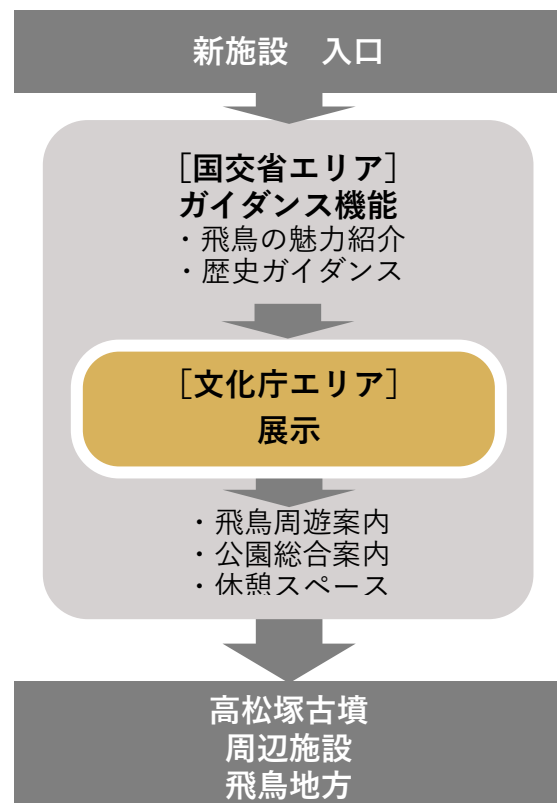
高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称、以下「新施設」）は、10 年におよぶ修理が完了した国宝高松塚古墳壁画を保存管理しながら、広く公開活用を行い、また、飛鳥地方のゲートウェイ施設として、国土交通省（以下、国営飛鳥歴史公園）と一体的整備を行うものである。これまでの「古墳壁画の保存活用に関する検討会」において、新施設に対して、古墳壁画・石室石材の調査研究・保存・展示・メンテナンスの機能を一体とすることが求められている。

展示については、来館者が国宝高松塚古墳壁画・石室石材の価値や魅力と保存の意義とともに飛鳥地方の歴史や風土・特別史跡の価値・国際交流の歴史などについてより深く理解できる展示が求められる。また、周辺施設との役割分担や展示内容の差別化、国営飛鳥歴史公園館のガイダンス展示から文化庁エリアの常設展示、古墳壁画・石室石材保存管理室（観覧区画）へと至る一体的な流れの創出など、来館者に不自由なく適切な情報と知見・体感を提供する。さらに多様なニーズに応じて質の高い付加価値な機会や鑑賞体験を実現する必要がある。

新施設では、文化財の活用や民間事業者の参画の導入等、文化施設のロールモデルとなるべく、文化庁エリアの展示に関しては一部（ミュージアムショップ等）を除き観覧料を設定する方向で検討を進める。

本方針は、文化庁エリアの展示に関して、展示手法と形態、コンテンツ構成とストーリー等を整理した。

新施設全体の展示構成（案）



II 高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）展示について

1 基本的な考え方（文化庁エリア全体）

現在は、各所で高松塚古墳関連資料が保管・展示されている。新施設では、高松塚古墳と古墳壁画をメインテーマとし、壁画の実物展示を含む体系的な展示を行う。来館者が高松塚古墳の魅力を感じ様々な知識が得られる展示を体験したうえで、国宝高松塚古墳壁画を鑑賞することにより、高松塚古墳及び古墳壁画の全容について理解を深められる展示を実現する。

また、新施設の周辺には、高松塚壁画館、飛鳥資料館、キトラ古墳壁画体験館四神の館があり、特に高松塚壁画館、飛鳥資料館では、高松塚古墳及び壁画に関する展示を行っている。新施設では、それら各館との連携を図り借用資料による展示を行うことで、国宝の壁画・石室石材をより深く理解できるよう、体系的な展示を行う。さらに、高松塚古墳及び壁画の整備・保存管理・修理を行ってきた歴史と未来に向けた挑戦についても、展示コンテンツとして展開する。

※高松塚古墳壁画保存管理公開活用施設（仮称）基本計画

【基本方針】

- 国宝高松塚古墳壁画・石室石材の価値や魅力、保存の意義を、飛鳥地方の歴史や風土、特別史跡の価値、国際交流の歴史などを踏まえながら広く発信する。
- 飛鳥地方の導入拠点として、国宝高松塚古墳壁画・石室石材をはじめとする文化的遺産についてより深く理解するため、必要な情報を提供する。
- 国営飛鳥歴史公園館との一体的な整備によって、古代国家の形成過程を示す飛鳥地方に残る歴史、風土への理解促進と体感に寄与する。

【周辺施設との連携により展開するテーマ】

●高松塚古墳・古墳壁画をより深く知る

〔常設展示〕で高松塚古墳・古墳壁画の価値を知り、〔古墳壁画・石室石材の展示〕により、本物の古墳壁画や石室石材を鑑賞して魅力に触れる。

その後、〔高松塚古墳〕〔高松塚壁画館〕へ誘導し、高松塚古墳を立体的かつ多視点から体感する。さらに、〔周辺施設〕へ誘導し、実物資料等の鑑賞により理解を深める。

●古墳や古墳壁画に関する多様なテーマを掘り下げる

〔企画展示〕により、高松塚古墳・古墳壁画に関する調査研究成果や国内外の古墳・古墳壁画に関するテーマをより深く理解する。

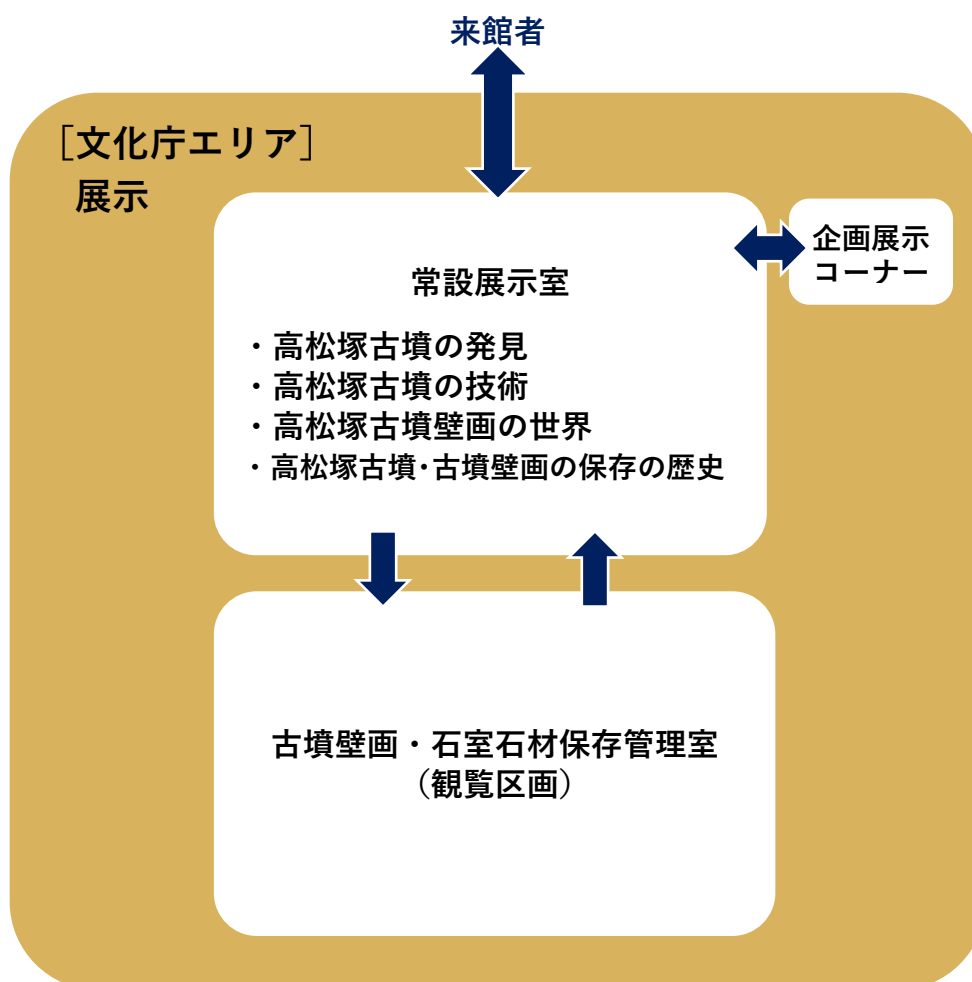
2 展示資料、手法について

高松塚古墳出土資料、高松塚古墳発掘調査時の収集資料、高松塚古墳壁画に関する調査研究データ・関連資料、壁画発見から現在に至るストーリーやエピソード（写真、映像、新聞記事・ニュース映像、関係者の証言 等）を収集し、展示する。実物資料の他に、レプリカやグラフィック等を用いる。

※「Ⅴ 主な展示候補となる高松塚古墳関連資料リスト」参照

3 展示空間構成

新施設では、古墳壁画・石室石材の実物を、詳細な解説や発掘調査で得られた資料等とともに観覧することにより、古墳壁画・石室石材への理解や体感がより一層深まるよう、常設展示室と古墳壁画・石室石材保存管理室を連続した配置とするとともに、企画展示コーナーやミュージアムショップも併設する。文化庁エリアの入退口に必要な設備の導入を図るなど、ゾーニングを行う。



4 展示の形態

(1) 常設展示

【グラフィック、映像、立体造形やレプリカ等で展示を構成し、高松塚古墳や古墳壁画を詳しく紹介する区画】

高松塚古墳や古墳壁画について、来館者が多様な視点から楽しみながら理解を深め、その価値や魅力を感じることによって、実物の壁画を鑑賞する助けとなるような展示とする。

さらに、来館者の多様な知識・関心や要求に応え、常設展示でも満足感を得られるように工夫した展示及び展示内容を展開する。

[留意点]

- 1 展示内容については、学術的な知見を踏まえて分かりやすいものとする。
また、最新の研究成果を反映しやすい展示とする。
- 2 文化財保存と文化財保護行政について理解を深められるように意識する。
- 3 国営飛鳥歴史公園エリアの展示内容との連携を図り、ストーリーやデザインの連続性を確保するとともに内容重複を避ける。
- 4 「埋葬空間」としての尊厳を有する空間を実現するとともに、来館者が実際に石室内の空間を体感できるような展示を導入する。
- 5 高松塚古墳に関わる主要資料については、可能な限り実物を展示する。展示が困難な資料についてはレプリカを用いて適宜内容を補完する。
- 6 原則として、厳密な温湿度管理など保存環境に十分な配慮が必要な資料の展示は行わない。
- 7 発掘調査時の採取資料やその他の収蔵資料を有効に活用した展示とする。
- 8 映像や音声、デジタルコンテンツ等を活かして、分かりやすい展示とする。
- 9 文化庁が整備を検討している古墳壁画データベースと連携した展示を行う。
- 10 車いす利用者や高齢の方にも負荷のないよう、十分な通路幅を確保するとともに、できる限り段差の解消などの整備を行う。また、子ども、視覚や聴覚など障がいのある方等に配慮した、誰もが見学しやすい展示を目指し、展示什器の配置や高さを設定する。

(2) 企画展示コーナー

【時宜に応じて、特定のテーマに沿った期間限定の展示等を行う区画】

高松塚古墳・古墳壁画・国内外の古墳、飛鳥地方・歴史等に関するテーマにもとづく企画展示のほか、イベント、物販等にも活用する。ただし、イベント、物販等の開催にあたっては文化財 IPM に十分配慮して実施する。

[留意点]

- 1 高松塚古墳・古墳壁画・国内外の古墳に関するテーマや常設展示の一部を取り上げたコラム的な企画展や研究成果を活かした企画展を開催するほか、イベント、物販等にも活用する。
- 2 国交省エリアのガイダンス機能での展示や文化庁エリアの常設展示を補完する展示内容と新たなる研究成果等に応じたトピックや時事的な企画を組み合わせる「企画展示のラインナップ」を開館前から企画しておく。
- 3 常設展示開催期間中に展示替えを行うため、閉鎖できるよう扉や可動壁等を設置する。
- 4 展示資料や展示什器、イベント機材やミュージアムショップの商品等の搬出入動線を確保した設計とする。

(3) 古墳壁画・石室石材保存管理室（観覧区画）

【保存管理区画に置かれた古墳壁画・石室石材（壁画が描かれている 9 石を含む 16 石）をガラス越しで観覧する区画】

古墳壁画・石室石材保存管理室は、保存管理するための「保存管理区画」と、保存管理区画をガラス越しに観覧する「観覧区画」とで構成されるものとする。それぞれ形状が異なる石材を一定の高さで誰もが観覧しやすいように配置し、観覧区画では、奥行きのある壁画面を考慮した床高とする。

古墳壁画・石室石材保存管理室では展示ケースも活用し、古墳壁画・石室石材のほか、厳密な温湿度管理等の展示環境を整える必要がある実物資料も展示する。

[留意点]

- 1 古墳壁画の拡大図など、古墳壁画の鑑賞を補助するための工夫を行う。
- 2 観覧区画で展示を行う場合には、照度をできるだけ低減するとともに、観覧時以外の照射時間を減らすなど、古墳壁画へ影響を与えないよう配慮する。また、観覧区画での長時間にわたる滞留を避けるよう留意する。
- 3 観覧区画への入場にあたっては、必要な設備の導入を図る。

5 展示解説について

展示解説は国内外の多様な来館者が高松塚古墳や古墳壁画について正しく学び、より深く理解できるよう展示を補完する。

- 1 ユニバーサルデザインに配慮し、触れる展示による説明や音声・点字等による解説、車いすに対応した適切な高さや設置位置等を工夫する。
- 2 テーマに関係する様々な展示解説を用意するとともに、展示資料にキャプションを付して解説を行う。一般向けの解説の他に、低い位置に子供向けの解説を配置するなどの対応を検討する。
- 3 グラフィックパネルによる展示解説に加え、デジタルサイネージや映像等を交えてより詳しい情報や分かりやすい解説を提供できるよう、工夫する。
- 4 理解を促進するツールとして、多言語対応を行う。
- 5 展示について紹介するオリエンテーションや展示を解説するギャラリートークやナイトミュージアム等を行い、展示への興味や理解の促進を図る。

Ⅲ 常設展示室

1 施設概要

面積	445 m ² （予定）
天井高	4.5m（予定）
床荷重	5.0kN/m ²
文化財 IPM	管理ゾーン [活用ゾーン]
温湿度設定	夏季 26℃・50%、冬季 22℃・40%
照明	ベース照明と展示用照明の2種類を、展示工事で対応（予定）
防火・消火	・自動火災報知器 ・屋内消火栓 ・消火器
その他	・天井は、建築工事はスケルトン、濃炭色塗装仕上（予定） ・壁面仕上は、建築工事は基準内装までとし、それ以降は展示工事で対応（予定） ・床仕上は、建築工事は防塵塗装までとし、それ以降は展示工事で対応（予定）

2 展示のねらい

- 1 実物資料（古墳壁画・石室石材）をより深く鑑賞するために必要な情報を提供する
- 2 展示を見た後に、高松塚古墳・周辺施設・飛鳥地方を訪れたくなる展示とする
- 3 多様な世代や知識を有する来館者を想定し、分かりやすく伝える

3 コンテンツ構成とストーリー

展示室内でのコンテンツの順序やレイアウトは、建築プランに合わせて、展示のねらいを最大限に発揮できるよう、また、来館者に対して展示全体で連続した観覧体験を提供するよう、工夫する。

以下のコンテンツを、コンテンツ3、コンテンツ2の順で重きをおいた展示とする。

コンテンツ1 高松塚古墳の発見

ねらい 日本で初めて壁画古墳が発見され、大陸では存在するものの日本には存在しないと思われていた壁画古墳が日本にも存在していたことが明らかとなって人々に衝撃を与えたことを、当時の写真や映像等のさまざまなメディアを交えて、関係者の思いや当時の社会の雰囲気を感じられるような展示とする。さらに、歴史年表等の活用や高松塚古墳の位置関係を示すことで、来館者自身が被葬者の特定につながるストーリーを紡げるような展示とする。

ストーリー 被葬者、築造後の歴史

江戸時代に文武天皇陵と考えられた時期もあったが、現在も被葬者の特定には至っていない。「高松塚」の由来は、墳頂に1本の松が生えていたことによると伝えられている。また鎌倉時代に盗掘を受けており、石室の南壁石・壁画・資料には、生々しく盗掘を物語る痕跡がある。

発見のインパクト

30cm四方の切石の発見をきっかけに昭和47年3月から開始された発掘調査により、壁画が発見され、テレビや新聞報道により広く発信され大きな話題となった。これをきっかけに、考古学ブームが巻き起こり、明日香村に大勢の観光客が訪れるとともに、飛鳥保存の機運がさらに上昇するきっかけとなった。

コンテンツ2 高松塚古墳の技術

ねらい 墳丘の形や位置、大きさとともに、石室の形や大きさ、壁画の有無など、東アジアや日本国内の古墳との比較や変遷により、歴史の中での高松塚古墳の位置づけを知る。さらに、発掘調査や調査研究によって明らかになった古墳の築造方法や石室の構造等を知ることで、高松塚古墳に関わったいにしえの人々の存在や手作業を感じる。石室の構造、古墳築造や石材加工の技術について、実物資料と原寸大模型・レ

プリカ、映像等を組み合わせて、来館者が体感的に学べるような展示とする。

ストーリー 墳丘及び石室の形状・大きさ

墳丘は、高さ 7.2m 以上、直径は上段 17.7m、下段 23m の二段築成の円墳で、古い時代の古墳と比べ小型化しており、墳丘を築く古墳としては最終末のものである。石室は 16 石の二上山凝灰岩で構成され、内部は長さ 264.8cm×幅 103.2cm×高さ 113.4cm の大きさである。

高度な土木・石工技術、地震痕跡

丘陵の斜面に平らな基礎を築造。二上山から切り出した 16 石の凝灰岩を組み上げ、石室を構築した。石室の周囲を版築により埋め固めて第一次墳丘を完成させ、南側に墓道を掘った後に、南壁面を開けて壁画を描いて、納棺した。その後、石室を閉鎖し墓道を埋め、第二次墳丘を構築し、古墳が完成した。版築には度重なる大地震によるひび割れが生じており、地震被害の甚大さを物語るが、高松塚古墳は約 1300 年間、崩落することなくその姿をとどめてきた。

木棺、副葬品

古墳の石室には黒漆と朱で塗られ装飾用の金具で飾られた木棺が置かれていた。盗掘で副葬品の多くは失われているが、刀の一部や鏡等が出土しており、高松塚古墳を特徴づける重要な資料となっている。

コンテンツ3 高松塚古墳壁画の世界

ねらい

東アジアや日本国内の古墳に描かれた壁画と比較を行い、高松塚古墳壁画のレプリカや映像等を使って壁画を詳細に鑑賞するとともに、壁画の描画方法や画題から読み取れる東アジアからの文化的影響、高松塚古墳壁画の有する繊細さから読み取れる日本文化の独自性も交えて、高松塚古墳壁画の魅力を知る。多様な視点からの多様な表現手法を用いて、古墳壁画の魅力を楽しみながら体感する展示とする。

ストーリー 装束、シーン設定

女子／男子群像、四神、日月像の図像や、それらが表わす空間表現等について、国内外の古墳壁画との比較から、東アジアとの文化交流の歴史、高松塚古墳壁画ならではの繊細なタッチ、壁画に込められた当時の人々の思いなどを示す。

顔料、道具

壁画は、水銀朱（辰砂）、緑青（孔雀石）、群青（藍銅鉱）などの顔料で描かれた。また、星や日月の表現には、金や銀が用いられている。材料や表現から推測される、壁画が描かれた状況や手法、手順等を示す。

コンテンツ4 高松塚古墳・古墳壁画の保存の歴史

ねらい 古墳を守ってきた地域の人々の姿、古墳壁画の発見から今日までの保存の取組を通して、古墳壁画が多くの人々に支えられてきたことを示す。さらに、古墳壁画の保存を通して得られた保存科学の知見や最新の研究成果を示す。

ストーリー 現地保存の困難さと石室解体

昭和 48 年に古墳全体を特別史跡に指定し、現地保存方針を決定。昭和 49 年に壁画を国宝に、出土品を重要文化財に指定。昭和 51 年から石室南側に保存施設を設置し、壁画の修理や定期的な観察を実施した。現地保存期間中は壁画を公開することができないため、模写の制作や写真撮影等が行われ、それらの資料は高松塚古墳壁画の存在と価値を世間に伝え続けた。取合部天井の崩落止め工事等によるカビの大発生、壁画損傷事故等を踏まえて、これ以上の石室内での壁画保存は困難であり、石室ごと壁画を取り出して解体修理を行い、将来的にはカビなどの影響を受けない環境を確保した上で現地に戻す方法が最善の方策とされた。

石室解体修理事業と発掘調査

石室を解体するにあたり、解体実験用石室等を用いての多岐にわたる検証シミュレーションを実施し、様々な分野の専門家が結集した石室解体修理事業は平成 19 年 8 月末に完遂された。墳丘から石室を取り出すため、解体修理事業に前後して、墳丘や石室構造および造営方法を明らし、高松塚古墳に関する情報を後世に伝えることを目的とした発掘調査も行われた。発掘調査により、古墳の構築過程、高度な土木・石工技術及び壁画の劣化原因に関する多くの知見と成果が得られる。

保存修理技術の向上

平成 19 年から仮設修理施設において修理作業が行われ、令和 2 年に完了した。この修理作業や調査研究で、壁画劣化原因の調査研究、酵素を用いた汚染物の除去をはじめとする様々な手法が開発され、古墳壁画のみならず、今後の文化財保存においても寄与する保存科学的な成果と修理技術の発展が得られた。修理完了後も点検・メンテナンスを定期的に行っており、長期にわたる取組は、修理技術の継承においても一翼を担っている。さらに、定期的な仮設修理施設の作業室の一般公開にて多くの人々が古墳壁画を観覧できるようになった。

高松塚古墳と壁画に関わる課題や謎、未来への挑戦

高松塚古墳と壁画に関わる課題（石室石材を現地に戻して保存するための技術や未確定の壁画の色料等）や未解決の謎（被葬者、切石の役割等）を示すことで、次世代に対して、高松塚古墳壁画への興味を喚起するとともに、守り伝える当事者としての意識を育む。

4 展示展開例

古墳壁画の保存活用に関する検討会 新施設ワーキンググループの委員から参考として示された主な展示展開例は、以下の通り。

①活用を試みたい資料

- ・ 高松塚古墳壁画発見のきっかけとなった「切石」
- ・ 版築切り取り
- ・ 地震痕跡模型
- ・ 墳丘土層はぎ取り（墳丘の大きさを感じられるよう全体像を示す、石室や棺との関係を表現する）
- ・ 当時の報道資料

②古墳に関わった人々の追体験

- ・ 古墳築造・壁画描画体験（版築作業、狭い石室内で絵を描く等）
- ・ 囲われた石室大の空間での被葬者体験
- ・ 埋葬儀礼の再現
- ・ 壁画に描かれた装束の着装体験
- ・ 古墳壁画発見の追体験（生姜や芋の貯蔵穴から切石を発見）
- ・ 石室内での写真撮影や模写等

③その他活用を検討したい技術・手法等

- ・ AR・VR や生成 AI を含む最先端技術等を活用したインタラクティブなデジタル展示
- ・ 制作当時の壁画の復元
- ・ 現代における保存や復元に関わる技術
- ・ 持って帰れるアクティビティ（漆喰の上に絵を描く体験、切り絵、ぬり絵、オリジナル壁画で石室を再現するペーパークラフト等）

IV その他

1 観覧料

常設展示室及び古墳壁画・石室石材保存管理室への入場については、観覧料を設定する方向で検討する。

2 運営への民間事業者の参画

新施設については、将来にわたり安定的かつ持続可能な運営を図る観点から、民間事業者の知見やノウハウを積極的に活用することを想定している。来館者対応に関わる業務に加え、企画展示コーナーやミュージアムショップ等の運営等、提案を広く受けながら、民間事業者が主体となって担うことができる仕組みとすることで、多様な発想や柔軟な運営手法を取り入れ、来館者の関心やニーズに応じた魅力的なコンテンツの継続的な創出を図る。